

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
プロジェクト研究 (自由プロジェクト研究)
2008 年度研究【経過・成果】報告書

研究課題	教師志望学生の教職観の形成過程に関する追跡調査研究 —立教大学を事例として—		
研究代表者	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	前 田 一 男 印	
研究組織	所属大学名等・職名	氏名	
研究期間	2008 年度	～	年度
研究経費	2008 年度	年度	総計
	500 千円	千円	千円

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

昨今、教師教育をめぐる環境は、養成、採用、研修全般にわたり、大きく変化しつつある。そのような中で、立教大学に在籍している教職課程登録者および教育学科の学生が、大学における教員養成を経験することで、教職観・教師観がいかに形成されていくのか、あるいはどのように変化していくのか、その過程を、アンケート調査によって丁寧に追跡調査しようとするものである。

この研究はまた、立教大学においてどのような意識を持った教師志望の学生がいかに養成されているのか、教育養成期間における教師の専門性の獲得プロセスの実証的研究でもある。現在 3 年生の 204 名にのぼる学生の意識調査が集められ、集計されつつあるが、それらの基礎データは、一私立大学の有力な事例研究となると同時に、立教大学における教員養成教育の自己点検・自己評価の意味を持つ実証研究ともなるだろう。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[教師教育] [ライフコース] [教師の専門性]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1 研究経過の概要について**

今回の研究においては、2008年現在で3年生となっている教職課程履修者および教育学科の学生を対象にして、大学入学直後の時点で抱いていた教育観、教職観、これまでの教育経験に対する評価などが、その後の大学生活を経て、どのように変化しているのか、いないのかを追跡調査し、その要因や背景を検討することを目的とした。

このような研究の着想は、教員養成期間のなかで、教師としての力量や、教職観、課題意識などがどのように形成されるのかを、同一の対象者を4年間追うことによってリアルに把握していくと同時に、大学時代における学習や諸経験を、生涯にわたる教師の成長に関わるライフコースの一過程として位置づけようとしたことにある。これらは、いずれも教師の専門性がどのように獲得・形成されていくのかという基本的課題のなかで繋がっている。

今回の教職課程履修者および教育学科の学生については、すでに2006年にアンケート調査を実施しており、大学入学直後の時点で学生が抱えている教育観、教職観、これまでの教育経験に対する評価などを把握している。今回の調査の特徴を浮かび上がらせることと同時に、前回調査との比較が課題となる。

作業経過について述べておこう。前期中には、アンケート調査表の作成は終了していたが、大学内で実施される授業評価アンケートと重なり、アンケート調査の実施は10月以降にならざるを得なかった。教職課程履修者に対しては、池袋キャンパスで2回、新座キャンパスで1回、それぞれの教職課程ガイダンスに出向き、ガイダンス終了後にアンケート調査への記入の協力を求めるとともに、そのまま帰宅する学生についてはアンケートを手渡し、郵送してもらう方法をとった。教育学科についても、11月以降3年生が全員出席する必修授業で協力してもらい、回収した。さらに、教職課程を途中で断念した学生については、2006年実施のアンケート調査より、再度協力を得られるように理解を求めて本人から提供された情報によって、郵送によるアンケート調査を実施した。

3年生対象者としては有効回答者を204名(男性77名・女性126名・不明1名)集めることが出来た。3年生の教職登録者数は約500名ほどであることから、回収率は約40%であった。学部別にみれば、文学部139名(68%)、理学部30名(15%)、経済学部12名(6%) (以下、5学部省略)で、ほぼ9割を占める。そのうち、教育学科の初等教育専攻の回答者は55名で、これは当該学年の79%にあたる。

文学部のなかに所属する教育学科の在籍者(特に小学校教員を志望する初等教育専攻)は、教育問題への関心や教職への志望に関して、他学部・他学科の学生とは何らかの違いがあるかも知れず、また大学入学後に教育に関する諸問題について学ぶ機会は明らかに他の学部や学科に所属する場合に比べて多い。この8割近い数字は、その差異を考察する上で、その持つ意味や影響について考察できる条件となっていると思われる。

なお、アンケート集計については、2009年1月に単純集計が終了し、かつ1月～2月にかけて自由記述をすべてデータ化した。

2. 研究成果の概要について

質問項目は15あったうち、ここでは、教育学科(教育学専攻と初等教育専攻との合計85名)が、他学部・他学科(119名)とのクロス集計によって、教職観・教育観などについて、どのような差異が現れているかについて、その特徴的な傾向についてのみ取り上げておこう。

① 教職志望度 (問 8-1)

教育学科の学生は、教職志望の度合いが高い。特に初等教育専攻にその傾向がみられる。

研究【経過・成果】の概要 つづき

現時点での教職志望度の強さ 「できれば」 + 「強く希望」(5件法・上位2件)
 教育学科(46名 54.1%)・他学部他学科(44名 37.0%)

② 教職志望度の変化(問8-3)

大学入学当時と比べて、教育学科の学生の志望度が、他学部・他学科の学生に比べて、より強くなっている。

入学以来の教職志望度の変化「やや強く」 + 「かなり強く」(5件法・上位2件)
 教育学科(39名 45.9%)・他学部他学科(44名 37.0%)

③ 教職魅力度(問9-1)

教育学科の学生の方が、教職の魅力了他学部・他学科より、より強く感じている。

現時点での教職魅力度の強さ「強く」(5件法・上位1件)

教育学科(38名 44.7%)・他学部他学科(28名 23.5%)

④ 教職魅力度の変化「やや強く」 + 「かなり強く」(5件法・上位2件)

大学入学当時と比べて、教育学科の学生の魅力度が、他学部・他学科の学生に比べて、より強く感じるようになっている。

教育学科(43名 50.6%)・他学部他学科(43名 36.1%)

これらの傾向はある程度予想が可能であったものの、それにしても教育学科の学生の「教職志望度」の高さおよび「教職魅力度」の強さが、大学入学当時よりも、それぞれ高くなり強くなっていることが、特徴的にデータから読みとることが出来た。

その原因や要因についての分析はまだ充分になされていないが、授業内容についていえば、教育学科の専門科目についての満足度が72.9%(62名「やや満足」 + 「大いに満足」と高くなっており、一定の影響力が予想される。その他、他学部・他学科との比較のレベルでしかないが、教育学科の学生は、教育や教師のイメージを形成する際に、授業・サークル活動などの大学生活やマスコミ・書籍・映画などのメディアに、より大きな影響を受けていることがわかった。

⑤ 大学生活とメディアによる教育・教師のイメージ形成(問5-1)

学生生活からの影響「ある」 教育学科(70.6%)・他学部他学科(63.0%)

メディアからの影響「ある」 教育学科(34.1%)・他学部他学科(19.3%)

教職志望度を高める背景に、2008年秋以降の世界的な金融危機に直面した、就職状況の悪化があったかどうかは、データの分析からは明確には分からない。しかし間接的には、教師という職業の経済的安定について、安定しているとの評価が65.8%(56名「やや」 + 「とても」と比較的高いことが指摘でき、他学部・他学科では、さらに高く79.9%(95名「やや」 + 「とても」となっていることを考えれば、民間企業との比較から公務員の安定的な待遇が意識されていることは十分に予想出来る場所である。

教師の力量として重要と思われる力についても、初等教員と中等教員との専門性について示唆的な結果が出ている。最重要と考える16項目のうち、教育学科は、1位「子どもに積極的にかかわっていく態度や熱意」(26名 30.6%)、2位「子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力」(19名 22.4%)、3位「わかりやすく授業を展開していく力」(13名 15.3%)となっている。他学部・他学科も、1位「子どもに積極的にかかわっていく態度や熱意」(33名 27.7%)、2位「わかりやすく授業を展開していく力」(28名 23.5%)、3位「子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力」(25名 21.0%)となっている。3位までの3つの項目が他の13項目とは区別される多い指摘になっており、それは教育学科と他学部・他学科と共通するものであった。その共通性と、順位付けの微妙な違いは、どのような力量が教師の専門性として求められているかについての学生たちなりの現状の判断が含まれていると考えられ、さらに他の項目と重ね合わせながら、分析していく必要がある。